

和泉自治会

1、基本データ

○地区名 和泉地区

○地区人口

530人（平成27年1月1日現在）

○面積 332平方キロメートル

○地区の沿革

和泉地区（旧和泉村）は、福井県の東端に位置し岐阜県に境を接し、面積332平方キロメートルの約9割が山林であり、四囲山岳を形成し、その中央を岐阜県境に源を發する九頭竜川が東西に貫流している。また九頭竜川をせきとめた九頭竜ダムを始め、大小複数の人造湖を形成している。



九頭竜ダム湖

人口は昭和40年に5,723人であったが、昭和43年の九頭竜ダム完成や昭和62年の日本亜鉛鉱業中竜鉱山の採掘中止などが影響し、平成2年には846人にまで激減した。この人口の絶対数の少なさ、豪雪地帯・山村地域という地理的条件、工業用地条件の欠如による魅力ある職場の少なさ、都市的生活環境整備の立ち遅れ等による若者の不定着により過疎化が進んできた。

このような中、旧和泉村では地域の特性を生かしたむらづくりの理念のもと観光と農林水産

等地域産業の連携による内発的地域振興を目指してきた。特に観光には力を入れ「観光立村」を掲げ、昭和40年代後半より多くの観光施設の整備を行ってきた。「九頭竜国民休養地」や「和泉前坂家族旅行村」、「天狗岩ファミリーパーク」などの保養施設やキャンプ場、また「九頭竜スキー場」も整備してきた。さらに平成に入り民間のスキー場（福井和泉スキー場）がオープン、下山地区では、平成元年に試掘された温泉を利用し「九頭竜保養の里」を整備し、日帰り温泉施設、ホテル、コテージなどのリゾートゾーンを形成してきた。

今年で35回目を迎えた「九頭竜紅葉まつり」は、10月に九頭竜国民休養地を会場として行われ、県内でも有数のイベントとして定着し、今年度も2日間で6万6千500人の来場者で賑わった。同会場では5月には「九頭竜新緑まつり」も開催され4万8千500人の来場者が訪れている。



九頭竜紅葉まつり

交通網も岐阜県側で国道158号線に繋がる東海北陸自動車道が整備され、中京圏からの距離も短縮され「福井県の東の玄関口」と位置付けられるようになった。

和泉地区は中世から穴馬郷と称せられ、南北朝時代から江戸時代を通じて次々と支配者が変わり、天領として明治時代を迎えている。明治

22年町村制実施に伴い上穴馬村、下穴馬村に分かれ、その後昭和31年9月30日に合併して和泉村となり、さらに昭和34年10月14日に石徹白村の一部を編入した。そして平成の大合併により平成17年11月7日に大野市と合併し現在に至っている。

○実施主体

和泉自治会

それぞれの事業は自治会及び自治会に所属する団体が主体となって実施した。

2、現状と課題

和泉地区は、合併後の9年間にも人口が急激に減少しており、729人（平成17年11月）から530人（平成27年1月）へと△199人（△28%）となっている。さらに大野市街地から約30kmの距離があり、行政サービス低下への懸念や若者の流出により高齢化が進み地域力・マンパワー不足による地域の衰退、経済情勢の悪化による観光客の減など、当地区の将来への不安が増大している。

合併前は小さな自治体であり、昔から電源開発のダム事業や中竜亜鉛鉱業株式会社の鉱山など大きな税収等の恩恵を受け、きめ細かな行政サービスを受けていた。このような状況もあり住民が自ら行動を起こし自らの手で事業を行うという意識が薄く、行政に強く依存している状況であったといえる。

合併を機に、このような状況は一遍し、各種補助金の削減やこれまで無料だった公共水道料金の発生など、少しずつではあるが依存体質から脱却しつつある。

3、事業内容

平成25年度は、越前おおの・九頭竜花桃回廊

プロジェクトをはじめとする4事業を実施した。今年度も花桃事業をはじめとする3事業を実施した。

1和泉花木の里事業

① 前おおの・九頭竜花桃回廊プロジェクト
(花桃育成管理)

主体：越前おおの・九頭竜花桃回廊実行委員会

②道端花いっぱい運動

主体：自治会

2青葉の笛フォーラム事業

主体：青葉の笛保存顕彰会

3地域づくり計画活動事業

主体：自治会

1-①越前おおの・九頭竜花桃回廊プロジェクト

平成21年11月、和泉自治会の賛同を得て、民間企業と地元住民による自主事業団体「越前おおの・九頭竜 花桃回廊実行委員会」が、この地域に花桃の植樹・育成事業を図ることにより、観光拠点としての地域づくりに寄与することを目的に発足した。



道の駅の花桃

平成22年4月には長野県上伊那郡阿智村へ視察研修を実施し、平成22年から24年の3ケ年で1500本の植樹を行い、管理を行っている。自治会も実行委員会の目的に賛同し共通

認識をもち、実施主体である実行委員会の事業推進に協力している。

1-②道端花いっぱい運動

越前おおの・九頭竜花桃回廊プロジェクトにあわせて、地域を花でいっぱいにするを目的として実施した。各世帯や事業所にプランターを貸出し、普段の生活で行き来する家の前の道路脇に花を咲かせることで、集落内の美化と癒しなどに繋げる。

2青葉の笛フォーラム事業

和泉地区に古来より源氏の嫡男 源義平がこの地に残したと伝えられている青葉の笛が保存されている。この青葉の笛を顕彰しようと、青葉の笛保存顕彰会が中心となって「フォーラム青葉の笛」を毎年開催している。今年は保存顕彰会が創立25周年を迎える記念事業として、しの笛プロ奏者を迎えてフォーラムを開催した。

3策定計画活動事業

平成25年度に作成した「和泉地区地域づくり計画」を印刷し、各世帯、関係機関に配布した。また活動計画を実践していくために3つの部会で、活動に向けて調査や検討会を実施。地域資源を生かして、結の精神によって自立した地域を目指していく。



4、事業の成果

1-①越前おおの・九頭竜花桃回廊プロジェクト

(1) 花桃の植樹

初年度は、平成22年5月29日(土)30日(日)の両日、同地区の九頭竜保養の里、九頭竜国民休養地、道の駅九頭竜周辺に約460本の「花桃の苗木」を植樹し、県内外より2日間で約1,000人の参加者が集まった。また和泉地区全体で花桃を楽しんで回れるような地域を目指し、前坂地区、下半原地区、大納地区などへも10本前後の植樹を行った。

2年目は平成23年5月28日(土)、和泉前坂家族旅行村において植樹イベントを開催し、297名が参加し、約350本の苗木の植樹を行った。

このイベントでの植樹のほか、実行委員会で川合地区、角野地区、大納地区などへ約150本の植樹を行った。

3年目の平成24年度は九頭竜国民休養地をメイン会場とし、下半原地区と前坂地区にも植樹を行った。256名が参加し370本の植樹を行った。このほか大納、下山地区へも130本の植樹を行い、3ヵ年で1500本の植樹が終了した。

平成26年度は板倉地区の国道158号線沿いに、50本の植樹を行った。



植樹風景

植樹した苗木の枝か添え木には自分が植樹した木が分かるようにナンバープレートがついている。ここに自分の植えた花桃があるということから、再びこの地を訪れてみようと思う気持ちが生まれ、少しずつ愛着もわいてくるのではないだろうか。

実際に、植樹の後もその場所を訪れ、自分の植えた苗木の周りの草刈をする人や、和泉地区の新緑まつりや紅葉まつりに訪れた人が自分の植えた花桃を見て帰ることもあった。

(2) 花桃の育成管理

植樹後の育成管理も非常に大切であり、4年目以降の25・26年度は、春には約1500本の苗木の雪囲い撤去、秋には雪対策としての雪囲い、また消毒や除草剤、肥料散布などの作業を行った。実行委員会のメンバーやボランティアを募集するなどして随時行っている。



追肥作業の準備

雪解け後の4月13日には、3ヵ年かけ植樹し、昨秋に雪囲いをした花桃の雪囲いの取り外し作業を行った。85名の参加があり豪雪にも負けず無事冬を越せた苗木に一安心し、更なる成長を願い追肥も行った。



雪囲い撤去作業

そして10月18日には71名の協力を得て、来たる冬の雪に備え苗木が雪で折れないよう雪囲い作業を行った。参加者らは専門家の指導を仰ぎ、竹と荒縄を使って雪囲いを設置した。今回で5年目ということで、皆手際よく作業を進められていたが、特に荒縄で枝を束ねて縛る際の結び方である「男結び」を初めての参加者や子どもは教わりながら作業を行った。本数が多くかなり大変ではあったが、参加者らは一本も雪に負けて折れたりしないよう丁寧に作業を行い、将来この地域が花桃でいっぱいになり、多く方がこの地を訪れてもらえることに思いをはせていた。



雪囲い作業

作業のあとの交流会は、ステージでの楽器演奏やビンゴ大会などで楽しい時間を過ごし、ま

た和泉の食材を生かした昼食も堪能した。今年度は「しし肉ソーセージ」「山菜料理」「まい茸ちらし」など、参加者らは心地よい自然に触れながら併せて和泉の食材の魅力を存分に満喫していた。

参加者らはこのイベントを通して和泉地区に対する思いを深め、強く心に残る1日になったのではないかと感じている。これにより当地区の魅力が地区外にも発信され、大野市の新たな観光地の創造に手ごたえを感じた。

これらの作業を行うにあたっては、実行委員会のメンバーだけでは実施が困難であり、またこの管理を通じて地域の活性化に繋がっていくことを期待し、ボランティアの花桃管理グループ「花桃ガーディアンズ」を募集して行っている。



和泉の食材を生かした昼食



作業後の昼食の様子

和泉地区の住民だけでなく、地区外より多くのボランティアを募集することで、多くの方に和泉地区を知ってもらい愛着を生む。さらに地元住民と触れ合う機会を創出することが大切であると考えた。

実際、ボランティアには和泉地区以外の参加者が多く、作業を通して交流が生まれていた。

これを機に地元住民の交友範囲も広がり、さらに外部の情報を得ることや地域外の人の意見を聞く事で、今後の地域の発展また地域住民の意識改革に繋がっていくのではないかと感じとれた。

①-②道端花いっぱい運動

プランターの貸出しは、各世帯2個までとし、全体で100個を購入した。昨年に引き続き、プランターの貸出しを行い、道端を花でいっぱいにして通勤・通学・通園者など行き来する人に癒しを与えて、地域一体となった花運動が進むよう役割を果たしている。

一般世帯	21件
事業所、施設	14件



②フォーラム青葉の笛事業

人口減少や少子化により、伝統文化を継承していくことが難しくなっているなか、和泉地区

内の子どもや若年層をはじめとする和泉地区民が、和泉の歴史や伝統を知り、後世に伝えてくることが重要である。

また、この活動を通じて、地区内外の人と新たな交流を通し、和泉地区および大野市の知名度を上げるため開催している。フォーラム開催により伝統・文化継承と、地区外へ広く紹介されるものと思われる。



ためにビデオカメラを購入した。



3 地域づくり計画活動事業

平成25年度に作成した「和泉地区地域づくり計画」の部門別活動計画を実践に向けて3部会がそれぞれ活動を行っている。

今年度は、「人、伝統・文化チーム」が、毎年お盆に実施している地区夏まつりを盛り上げるために、会場周辺の清掃や飾り付けを行った。会場では、子供たちが郷土芸能である昇竜太鼓を披露し、地区民や道の駅に訪れた観光客など、多くの人が集まった。夜は昔から和泉に伝えられている穴馬踊りを、地区民や子供たちをはじめ帰郷していた多くの人々が踊り、文化の伝承と地区の連帯感が強まっていくのではないかと感じられた。

また、春に咲く花桃をはじめ紅葉など和泉地区ならではの風景、伝えていきたい文化行事、さまざまな活動を記録として残し、伝えていく

「産業チーム」では、山菜の畑栽培実施のため、先進地視察を行った。農林産物を利用した特産品など地域づくりに繋がっていくものと思われる。



「生活チーム」では、地区内の世帯・事業所等の電話番号、集落区長・担当民生員等の名簿、緊急時の連絡方法を記載した電話帳を作成した。高齢者が使いやすい電話帳作成をはじめとし、今後も高齢者等が住みやすい地域づくりを目指していくものである。



5、今後の展望

今年度実施した3つの事業において、和泉地区地域づくり計画にそった和泉地区の将来を決める重要な活動である「ここに住み続けられるために」を基本的な考え・共通の思いとして策定し、自ら考え、行動する自立した地域を目指していくものである。自治会に推進チームを設置し具体的な活動計画策定と、実施できるものについては順次行動に移している状況である。

5年前から動き出している越前おおの・九頭竜花桃回廊プロジェクトは、地区内外の多くの人の協力を得ながら進めており、地区住民が自発的に行動する見本となるものがある。今回の花桃とあわせて花をテーマにした道端花いっぱい運動の継続や、フォーラム青葉の笛事業などの歴史・伝統文化活動、その他多方向から推進していくことが重要で、それらの活動や資源を結び・組み合わせ・連携を図っていく。

平成17年の合併以降地区住民の間では、行政サービスの低下が懸念されている。これまで

小さな自治体のため行政を身近に感じ頼りすぎている部分もあったと思うが、すぐに考え方をを変えることは難しい。

この事業が行政に頼らず自主的に地域づくりに携わっていくという意識改革への転機になり、その結果、地域にリーダーを育て、人と人との繋がりや集い、結束力を高め、地域を牽引する大きな力へと変わっていく。すなわち地域力・市民力が向上していくものと確信している。結の故郷づくり交付金を有効活用してさらに地域づくりを推進していきたい。